

「いごば」に住まう

奈良 敏行



八月八日(二〇二四)は定有堂教室「読書室ピオトープ」だった。課題図書は多和田葉子『地球にちりばめられて』。近未来日本列島は水没し、人々はちりばって生きることとなる。主人公はスカンジナビアのあたりを中心に生きる。同郷人と出会う機会も失われた。この全域で生き抜くために「パンスカ」という言葉を作り出す。

《パンスカは母語なんかよりずっと優れた乗り物だ。》

《移民は一つの状況でしか使えない言葉を無数に覚えていく時間はない。》

「わたしたちはいつまでも移動しつづける」、だから必要な「ことば」はコミュニケーションの役に立ちさえすれ

ばいい、という覚悟と実行だ。水没するかもしれないこの国の人々を覚醒させる小説だ。もうひとつ主張がある。母語を国語として作用させると抑圧的になる。母語の外にある「パンスカ」はその抑圧解き放つ力があり、人を自由にする。

わたしは小学生のころ国語辞典を読むのが好きだった。一つの「ことば」の意味を調べ出すと説明が限りなく重層的につながり面白かった。そこを入口として本を読むのが好きになった。そうしていまでも本を読むのが好きだが、とくに目的があるわけではない。鉛筆を手にし、心に響く「ことば」に傍線を引く。そして未知の言い回しなどに出会うと、心の領土が広がるような喜びを感じる。

一九七三年に「日本沈没」という映画が公開された。母国が失われた後、母語はどうなるのだろうかと思った。国語辞書が不要になりいままでもわたしを形成してきた「ことば」は無用のものになるに違いないとおののいた。自分の記憶はこの「ことば」の機微の中に生きているので、それが失われることは何かの終焉かと思えた。

読書会の報告者は海外留学経験もある英語教師だったので、ひとつの発見を教えてくださいました。日本語で話す優しい人が、英語で話す理路整然と自己主張をはじめると、確かにかつてわたしの周辺にもそんな人たちがい

た。定有堂にはネイティブ講師による英会話講座もあった。表象よりも指示を中心とする「ことば」だ。多言語話者は、人格を多重にすることができるともかもしれない。人は「ことば」でできているのだ。

ところで、わたしは最近毎日少しずつ『一日の言葉、一生の言葉』という本を読みつづけている。副題に「旧暦でめぐる美しい日本語」とある。詩人の白井明大さんの手になる歳時記風の趣向の本だ。「パンスカ」は多くの人に短時間で共有されるように「ことば」の意味の解像度を低く設定する。というか意味は不要なのだ。「いまここ」で「モノ」「コト」を伝えられればいいのだ。

雨上がり庭の木の葉っぱに水滴が丸まっているのが好きでよく茫洋と窓の外をながめる。

《青葉に降った雨が、そのまま葉っぱの上に残り、風に吹かれた拍子にパラパラと落ちてくることを、青時雨という。》

これが母語の解像度だと思った。「青時雨」は語れば一時間くらい「ことば」で構築された記憶の積み重ねへ導いてくれる。

詩人はこんな心象も語る。

《祈りと詩とは同じものではないけれど、ふたつが近づくことはある。祈りは言葉の形をとらないことも多く、詩は

言葉でありながら、言葉でないものになろう、なろうとするものだから、たがいに近づき、重なりあうこともあるだろう。》（七十五頁）

わたしは「無用」に本を読みつづける。「ことば」や「言い直し」に出合い、そこに傍線を引く、それだけの喜びのために本を読む。なんの役にも立たないというわけではない。「無用」の用というその場所に生きつづけるということだ。それだけのことだが、ときに「こころ」に火花が走ることもある。自分だけの「こころ」の陰影に許しのように明るみが差し込むことがある。一つの「ことば」が、取り返しがつかないと思っていたことへと救済の明るみをもたらす。

「ことば」に住みはじめたのはいつからだろう。一人遊びの好きだった幼少の頃から、いつも「ことば」が側にいてくれた。何かを伝えたいのではない。孤独は不自然ではあるが、至極あたりまえのことと教えてくれ、人知れずたくさんの慰めを与え、大切な心の支えとなった。

「パンスカ」は着脱自在さに意義があり、住まう「ことば」ではない。座右の銘だが、こんな言葉を自分の世界観の支えにしている。

《ものを考えるということの働きは、ことばを組み立て、文を作っていくという工夫のうちにある。》（柳父章）

わたしは「ことば」に住まいつづけていたいとあらためて確信するのだった。

2024.09.10

(参考)

多和田葉子 『地球にちりばめられて』 講談社文庫

2021

白井明大 『一日の言葉、一生の言葉 旧暦でめぐる美

しい日本語』 草思社 2018

柳父章 『現代日本語の発見』 てらこや出版